

# 芦田文夫教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 山 田 彌

芦田文夫先生の定年によるご退職に際して、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

芦田先生は、2000年3月31日をもって、定年により立命館大学教授の職を退かれます。先生は1962年4月に立命館大学経済学部専任講師として就任されました。それ以来今日まで38年の永きにわたって、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

芦田先生は1934年に京都市にお生まれになり、1953年に京都大学経済学部に入学されました。1957年3月に同学部を卒業され、引き続き同大学大学院経済学研究科に進学して研究者としてのスタートを切られました。そして5年後の1962年3月には大学院博士課程を単位取得退学され、同年4月に本学経済学部専任講師に就任、1965年に助教授、1972年には教授に昇任されました。先生は本学就任以来38年にわたって、経済理論、社会主義経済論、比較経済体制論、ロシア・東欧経済論などの科目担当者として学部および大学院の教育に当たられる一方、研究面ではソ連や東欧の社会主義経済に関する研究を、とりわけ1980年代末以降はこれら社会主義体制の崩壊と体制転換の過程の歴史的・理論的研究を、終始変わらぬ真摯な研究姿勢で精力的に取り組まれてこられました。

まず1968年に、様々な経済制度を人類史的視点から所有制を軸として検討した共同研究の成果として『経済学の基礎—所有の歴史—』を共著者として出版されました。また、大学院以来のテーマであるソ連や東欧の社会主義体制における経済メカニズムとりわけ「経済改革」への動向についての研究成果を、1976年に『社会主義的所有と価値論』として刊行されました。この本は詳細なソ連における理論史的整理をもふまえつつ、60年代半ばから始まるソ連・東欧の「経済改革」「民主化」への動きを、経済学の最も基礎的な理論としての「所有論」と「商品生産・価値法則論」を2つの軸において論理的に追跡していくという課題に取り組んだ気鋭の労作で、この著作で先生は京都大学から経済学博士の学位を取得されました。さらに、1976年出版の共著書『現代日本と社会主義経済学(下)』では、先進資本主義国での「民主主義的改革」と社会主義国の「経済改革」とを対比させ、計画化、企業の自主性と企業間協力、経営参加などの課題を将来展望的に展開され、ついでソ連の「社会主義的所有」の成熟度に関する共同の実証的研究の成果である1981年出版の編著書『ソ連社会主義論—現状と課題—』では、最も基層をなす生産力側面において、生産の集積と集中、分業と協業、専門化と協業化、合同化とコンビナート化にどのような遅れとゆがみがあるかを析出されております。

1980年代末の社会主義体制の崩壊以降先生は、グローバルな市場経済化の動きの中でロシアや東欧の「旧社会主義」からの体制転換がどのように行われつつあるのか、大きな文明的視点でみてそれがどのような意味を持っているのかを基本的なテーマにして精力的に研究に取り組みましたが、それらの一連の研究は1998年の著書『ロシア体制転換と経済学—文明史における市場化—』として結実しています。この本で先生は、たんに現在進行しつつある体制転換過程の経済的な現実の展開を追うだけでなく、他方でそれらをめぐる経済学の理論体系の展開をたどり、この両者を絶えず相互に交差させることによって現実の過程のより深い文明的・理論的視野からの位置づけをおこなうという困難な課題を自らに課し、この課題に積極果敢に取り組まれています。研究者としての先生の若々しい情熱に改めて触れる思いがしたのは私だけではないはずです。

先生は国際的な研究交流の面でも、ロシアや東欧をはじめとする多くの研究者・研究機関との研究交流などを中心に、終始活発な取り組みをされてきました。最近ではたとえば、本学の人文科学研究所とロシア連邦労働省付属労働研究所・科学アカデミー東洋学研究所との間で95年以降毎年開催されている「国際シンポジウム」の中心的役割を果たしてこられました。先生はまた長年にわたって「比較経済体制学会」の代表幹事や「比較経営学会」の理事をつとめられるなど、この分野における我が国の指導的な研究者の一人として重きをなしてこられました。

先生はまた教育に対してきわめて熱心に取り組まれてきました。学生の間で「仏の…」と伝えられてきた限りなく真摯で暖かい先生の人柄と深い学識は多くの学生を惹きつけるのに十分であったに相違なく、それが証拠に芦田ゼミは経済学部の人気ゼミのひとつでありつづけてきました。このゼミで学んだことを誇りにして社会の第一線で活躍されている多数の卒業生がおられます。

芦田先生は、学内行政の面でも大きな役割を果たしてこられました。1974年度に経済学部主事、78年度に経済学部長代行、78年度に学生部次長、86・87年度には教学部長と要職を歴任され、今日の立命館大学興隆の基礎を築いてこられました。とりわけ91～93年度には立命館副総長・立命館大学副学長の重責を担われ、大学教学改革をはじめ立命館学園の発展に向けて大きな役割を果たされました。

94・95年度のびわこ草津キャンパス（BKC）への学部移転の課題に際しては学部の議論に積極的に参加され、新コース制の導入など学部専門カリキュラムの刷新、理工および経営両学部とのジョイントによる新コース（文理総合インスティテュート）の創設など、新たなキャンパスでの経済学部新展開の基本的骨格づくりの検討に少なからぬ役割を果たされました。また先生には1998年度に経済学部創立50周年記念事業の実行委員会委員長に就任していただき、記念論文集や学部50年史・写真集の編集、記念式典や記念シンポジウムの開催、募金活動など記念事業全体の采配を振っていただきました。このほかにもこの数年間、国庫助成に関する全国私立大学教授会連合代表、立命館百年史編纂室主幹・副室長、学校法人立命館評議委員会副議長、経済学部人事委員長などの要職に就いていただいております。

21世紀を目前にした今日、これからの大学における研究と教育、そして経済学と経済学部のあり方について広く深い問い直しが必要となっていると思われます。また、21世紀を目指して経済学部の一層の改革をも考えなければならないことは言うまでもありません。このような時に、芦田先生がご退任になることは経済学部にとって誠に残念なことでありますが、これも時の定めと

あれば致し方ありません。私ども経済学部教授会は、先生の長年に及ぶご功績に対して名誉教授の称号をお贈りすることによって、私どもの微意を表したいと考えます。

幸い先生はお元気であり、ご退職後も本学の特別任用教授に就任していただく予定ですから、今後とも先生のお教えを受ける機会は残されています。

今後とも一層のご指導とご鞭撻をお願い申しあげるとともに、先生のますますのご健勝とご発展を心から祈念して、送別の言葉とさせていただきます。

1999年 8 月



芦田 文夫教授 近影